

甲南子育てひろば参加者の 子育て意識・実態調査からの一考察

小田和子・河内 彩・稲垣由子

A Study on Promotion of Cooperative Parenting Support between University and Community: Report of “Konan Kosodate Hiroba” (Parenting Support Program by Konan Women’s University)

ODA Kazuko, KAWAUCHI Aya and INAGAKI Yuko

Abstract: “Konan Kosodate Hiroba (parenting support program by Konan Women’s University)” was established by the cooperation of Kobe City with Konan Women’s University for the parent and child participation type child care support activity in 2007. A purpose of this report is to clarify the problem of the parenting support program by university support system. In the investigation to parents who participated in the program for one year in 2008, anxieties about child rearing decreased, and the effect of participation was proven. In the Konan Women’s University parenting support program, sense of security, safe place concerning the child care and the place of learning for parenting can be offered to the community if there is an enhanced support by the university.

1. はじめに

近年の都市化、核家族化、少子化、情報化など、社会状況の変容が、子育て家庭や家族を取り巻く地域社会におよぼす影響が指摘され、子育てに対する不安感や孤立感等を訴える親の増加が問題視されている。国の子育て支援をめぐる制度も、働いている女性への両立支援から家庭で乳幼児を育てている専業主婦への支援、全ての子育て家庭を対象とする支援へと拡大転換していった。行政主体の支援活動や、子どもとのかかわりを持つ現場での支援活動をはじめとして様々な支援活動が推進されてきた。

大学における子育て支援活動は、2004年少子化社会対策大綱（子ども・子育て応援プラン）における重点課題「IV子育ての新たな支え合いと連帯」の視点から、地域における子育て支援の資源のひとつとなりうるものであると考えられる。本学においても2004年10月より「甲南子育てひろば」を開設、2007年より

地域子育て支援拠点事業として事業内容をさらに充実させ現在に至っている。新ひょうご子ども未来プラン（H22～26年度の5年間）にも大学との協働事業を進めることが明記されているが、神戸市は大学と連携した地域子育て支援拠点作りとして事業を進めており、現在本学の他に神戸大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸親和女子大学が神戸市と連携してそれぞれ子育て支援活動を行っている。近隣の大学としては他にも、武庫川女子大学、関西学院大学、関西国際大学で取り組まれている事業である。

地域子育て支援拠点事業とは、児童福祉法第6条の2第6項の規定に基づいて、乳児または幼児及びその保護者が相互の交流を行う場所を開設し子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行うことにより、地域の子育て支援機能の充実を図り、子育ての不安感等を緩和し、子どもの健やかな育ちを促進することを目的とするものである。実施形態としては「ひろば型」「センター型」「児童館型」があり、事業内容としては、次に掲げるすべての事業を実施するも

のをいう。

- ①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進：子育て親子が気軽にかつ自由に利用できる交流の場の設置や子育て親子間の交流を深める取組等の地域支援活動の実施
- ②子育て等に関する相談、援助の実施：子育てに不安や悩みなどを持っている子育て親子に対する相談、援助の実施
- ③地域の子育て関連情報の提供：子育て親子が必要とする身近な地域の様々な育児や子育てに関する情報の提供
- ④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施：子育て親子や、将来、子育て支援に関わるスタッフとして活動することを希望する者等を対象として、月 1 回以上、子育て及び子育て支援に関する講習等を実施

女子大学である本学学内でひろば事業を展開することは、大学が地域の子育て家庭に貢献できると共に、子どもとかかわる仕事を目指す学生はもとより、将来母親として子育てを担う可能性のある多くの学生にとって子どもと直接ふれあうことのできる学びの場となり、さらにひろば参加者にとっても学生から頼りにされるという経験が親としての学びにつながる事が期待される。子育てひろばに親子が継続的に参加することで、親子関係はもちろん親同士子ども同士が自由にやりながらその関係性を深め、子育てに自信が持てるようになることが大きな目標であるが、今後、子どもたち、保護者、学生等すべてのひろば参加者が互いに尊重しあい育ちあえる場として発展していくためには地域の子育てに関するニーズを読み取り、大学が専門性を活かしてどのように応えていけるのかを探る必要があると考える。

本稿では、「甲南子育てひろば」の活動内容、利用状況、学生によるボランティア活動の状況を報告するとともに、参加者のひろばへの期待感と参加効果を調査・分析することで、地域に根ざした子育て支援活動としての「大学内子育てひろば」の今後の課題を明らかにすることを目的とする。

2. 「甲南子育てひろば」の活動内容 および利用状況

(1) 甲南子育てひろばの概要

2004 年 10 月大学内に「ひろば型」として週 3 回午

後のみ開室という形態でスタートした。2007 年より神戸市との連携で、子育て中の親子が集える地域子育て支援拠点づくりとして甲南女子大学の認定を受け、それまでの週 3 回の開催日を月～金の午前の部・午後の部に開室するようになる。

ひろばでは、保護者が責任を持って自分の子どもを見守り自由に遊ぶことを基本にしている。スタッフ（保育園および幼稚園の勤務経験を有する者）は親子の遊びを見守りながら、時には遊びの中に入って子どもとの関わり方を示したり、安全に遊びを進めるために気をつけなければならない点を具体的に示したりしながら、安心安全に親子が楽しく遊べる場を提供し、随時子育て相談に応じながら楽しく子育てができるよう保護者を支援することを心がけている。

ひろばは学内 2 号館 1 階にあり、①通常プログラム②夏季プログラム③わいわいトークを行っている。

また、学内の全学部からひろば活動への学生ボランティアや、卒業論文のためのひろば参加者への協力依頼を受け入れている。

(2) 甲南子育てひろばの活動内容

①通常プログラム

対象：0 歳～3 歳児とその保護者各 10 組（事前に登録し、毎週同じ曜日、時間帯に通年参加）
開催日：月～金（午前の部 9：30～12：00・午後の部 13：00～15：30、水曜日午後は閉室）

表 1

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
9：30～12：00	○	○	○	○	○
13：00～15：30	○	○		○	○

内容：子どもと保護者が自由に遊びながら、他の参加者と交流

スタッフは、遊びを見守りながらアドバイスをしたり、子育て相談を受けたりするとともに手遊びや絵本の読み聞かせを行う

②夏季プログラム

対象：0 歳～3 歳児とその保護者各 10 組（事前に希望の曜日・時間帯を登録）
開催日：7 月中旬～9 月中旬の月～金（午前の部 10：00～12：00・午後の部 13：00～15：00）
（水曜日午後、大学休業中は閉室）

内容：通常プログラムに加えて 7 月中は水遊びを行う

表 2

	講師	専門	テーマ
4月	稲垣 由子	発達行動小児科学・小児科医	育児に関する悩みの相談と講演
5月	稲垣 由子	発達行動小児科学・小児科医	育児に関する悩みの相談と講演
6月	倉賀野妙子	小児栄養	食育で健やか子育て
7月	白川 蓉子	幼児教育学	子どもの遊びと学びと発達
8月	稲垣 由子	発達行動小児科学・小児科医	育児に関する悩みの相談と講演
9月	稲垣 由子	発達行動小児科学・小児科医	育児に関する悩みの相談と講演
10月	西尾 新	認知心理学	子どもと遊び
11月	坂井 康子	音楽教育学	わいわいミュージック
12月	佐藤 眞子	臨床心理学・認知心理学	2歳児 イヤイヤ期の育て方
1月	小田 和子	ひろばスタッフ・元幼稚園教員	幼稚園・保育園への入園を控えて
2月	稲垣 由子	発達行動小児科学・小児科医	育児に関する悩みの相談と講演
3月	稲垣 由子	発達行動小児科学・小児科医	育児に関する悩みの相談と講演

③わいわいトーク

対象：わいわいトーク開催日のひろば参加者と希望者

開催日：原則として月1回

内容：学内の先生による各専門分野からの子育てに関連した話題提供、アドバイス、専門相談を行う

月に1回特別プログラムとしてわいわいトークを企画。通常のひろば活動中に専門家の話が聞けて相談に応じてもらえることが参加者に好評で、可能な限りスタッフが安全を確保しながら子どもたちの遊びを見守り、なるべく保護者が講師の先生の話に集中できるよう努めている。

H21年度の開催内容は、表2のとおりである。

(3) 甲南子育てひろばの利用状況

①参加者数（引越し等により欠員が生じた場合は随時募集しているため定員90組より多い）

H20年度 104組

子ども：延べ 2249人、保護者：延べ 2100人（総計4349人）

H21年度 110組

子ども：延べ 1776人、保護者：延べ 1610人（総計 延べ3386人）

H21年度は、平成20年度に比べると参加数が減少しているが、その理由として、新型インフルエンザの流行による休室（大学自体が休室、事前連絡により参加が3組以下の場合は休室）でひろばの開催日数が減ったことや、ひろばに参加している子どもたちや保護

者、兄弟が発症したことでの欠席が多かったこと、子どもの年齢が小さいことや母親が妊娠中で（21年度は、ひろば参加者で第2子、第3子を出産あるいは妊娠された方が24名いた）外出を控える参加者が多くみられたことが考えられる。

②子どもの年齢

0歳児の参加はいずれも兄、姉が参加しているときに誕生し、その後共に参加するようになったもの（表3、図1）。H20年度はその年度中に2歳の誕生日を迎える子どもが多く参加しており、H21年度は3歳の誕生日を迎える子どもが多く参加している。これは

表 3

	H20年	H21年
0歳児（該当年度4月以降に誕生）	4	5
1歳児（該当年度に1歳になる）	25	30
2歳児（該当年度に2歳になる）	58	36
3歳児（該当年度に3歳になる）	25	50
計	112	121

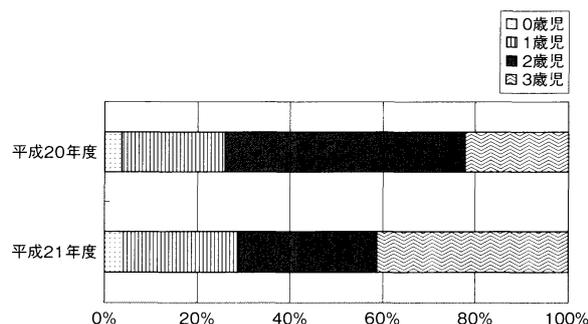


図 1

H20年度に参加していた2歳児の継続参加が多かったことによるものである。

③保護者の年齢

30～34歳の間がどちらも一番多く、次いで35～39歳となり、第1子との参加が7割近くを占めることを考えても比較的の第1子の出産年齢が高いことが伺える。これは、石岡・森本(2008, 2009)で報告されている状況と同様で、現代の晩婚化の様相が反映されている結果と思われる(表4. 図2)。

表4

	H20年度	H21年度
20～24歳	1	1
25～29歳	3	6
30～34歳	51	44
35～39歳	37	43
40～44歳	9	6
45歳以上	0	1
平均年齢	34.1歳	34.6歳

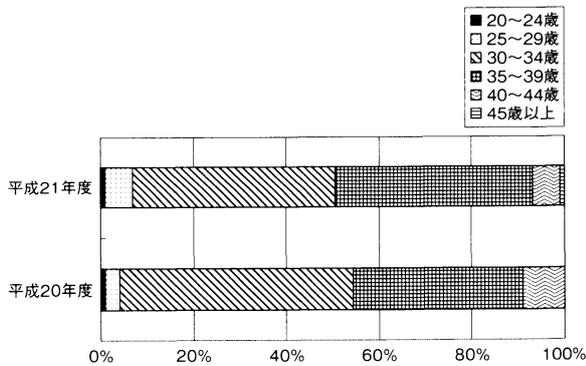


図2

④親子の関係

第1子との参加が多く、初めての育児で、親も子どもも友だちができればいいと思っての参加が多い。第2子・第3子との参加の場合は、上の子どもが小学校や幼稚園に通っている状況。ほとんどが母親との参加

表5

参加している親子の関係	H20年度	H21年度
第1子と親	69	71
第2子と親	23	28
第3子と親	4	0
第1子・第2子と親	8	10
第2子・第3子と親	0	1

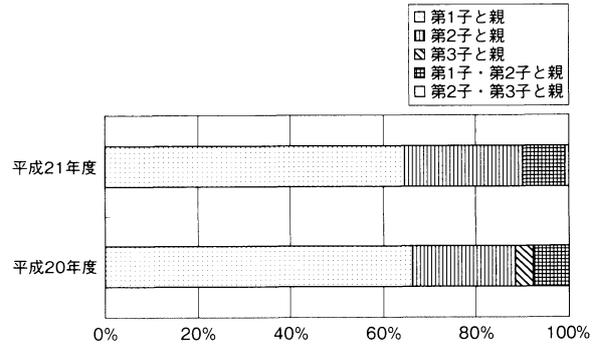


図3

だが、育児休暇中の父親や出産後の母親に代わって祖父母や叔母との参加もあった(表5. 図3)。

⑤居住地域

大学と同地域の東灘区からの参加がいずれの年も75%を超えている。隣の芦屋市からも多く参加している。遠くは垂水区や大阪市からなどである。遠くからの参加者には、本学の卒業生や実家が本学の近隣ということもある。(表6)

表6

	H20年度	H21年度
東灘区	81	83
灘区	5	2
中央区	1	2
長田区	0	1
須磨区	1	0
垂水区	2	0
芦屋市	10	17
西宮市	3	4
その他	1	1

(4) 子育て相談

ひろばで子どもを遊ばせながら、気軽に子育ての相談ができる雰囲気作りに勤めた結果、H21年度に参加者からの相談を受けたのは、121件であった(図4)。

どの年齢にも多かったのが「子どもとのかかわり方」(31件)についてで、次にトイレトレーニングなどの「生活習慣」(16件)、「幼稚園や保育園、幼児教室等」(16件)に関する相談がよせられた。

日ごろの行動を見ていて、スタッフ側が発達の面で気になる子どもに関しては、母親からの相談がなくて

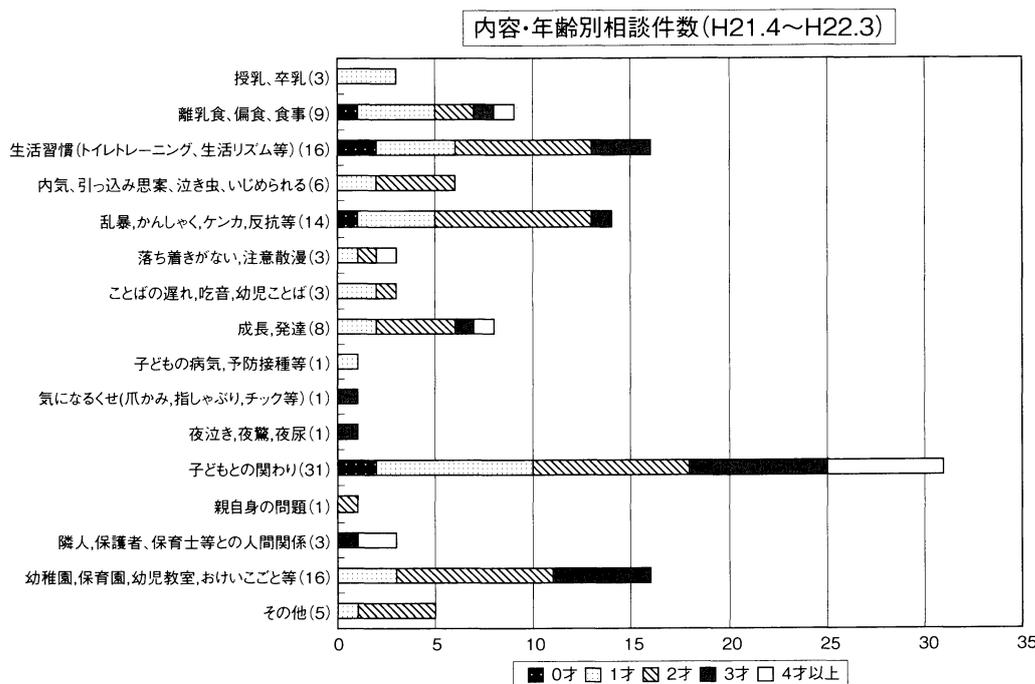


図4

も家庭での様子や検診のときの様子などを自然の会話の中で聞き出すようにし、他の相談機関の紹介、専門医の受診、一時預かり利用のすすめなど、それぞれにあった対応の方法を一緒に考えるようにしている。

(5) 甲南子育てひろばへの学生の参加状況

H20年、H21年度 学生希望参加

学生自身が希望して単発で参加する場合や授業で参加した学生数は表7のとおりである。

主に総合子ども学科学生の参加が多く、ゼミの時間に来室し子どもの観察をしたり、親子に手遊びや絵本の読み聞かせを行ったりした。

H20年度の参加学生数は、計121名、H21年度は、

計110名である。

H22年度学生ボランティア

2010年度からは甲南女子大学社会貢献室と協力し、学生ボランティアを定期的に受け入れることになった。

それまでは、参加したい学生は直接子ども室に来室し申し込んでいた。主に総合子ども学科の学生が多く、その背景には授業で来ることなどでなじみがあり参加しやすかったことも考えられるが、「総合子ども学科の学生でなければいけない」と思い込んでいる学生も多かったように思われる。

ボランティアセンターを通しての学生受け入れは、総合子ども学科の学生だけでなく、心理学科・生活環

表7

		卒業研究	託児ボランティア	授業	相談	自主的参加	クラブ	計
H20年度	1年			43				43
	2年		3	18				21
	3年			10	3		16	31
	4年	16	8			2		24
	M					1		1
	D					1		1
H21年度	1年			6				6
	2年		1	51				52
	3年			12				12
	4年	7	2	17				26
	M			2		12		14

境学科・文化社会学科・英語英米文学科・理学療法学科など、様々な学科の学生参加を促す結果となっている。

2010年5月～7月の3ヶ月間のボランティア参加人数は延べ225名で、この内総合子ども学科の学生は89名であった(表8)。

表8

総合子ども学科	89
心理学科	59
生活環境学科	28
文化社会学科	27
英語英米文学科	13
理学療法学科	9
合計	225

3. 甲南子育てひろば参加者への 子育て意識に関するアンケート調査

小田(2007)では、子育てサークルに参加する母親の子育て意識を、ポジティブな子育て感情としての「充実感」「親としての成長感」、ネガティブな子育て感情としての「不安感」「負担感」「孤立感」、それらと影響しあう「社会的意識」「社会参加意識」とをあ

わせて構造化し、サークル活動参加によって「不安感」が減少すること、積極的な参加傾向を示す母親ほど「充実感」が高くなることを実証している。登録制で同じメンバーと活動を共にするという点で子育てサークルと似通った形態を取る甲南子育てひろばにおいて、同様の手続きによって参加者の子育て意識の変化をとらえることで子育てひろばの効果を実証することを目的としてアンケート調査を実施した。

(1) 方法

調査対象：平成20年度甲南子育てひろば参加者

調査時期および内容：

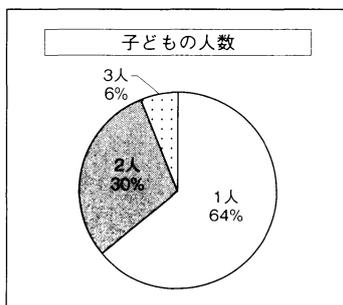
第1回調査は、子育て意識に関する質問44項目と子どもが生まれるまでの乳幼児との接触経験など保護者の属性、ひろば参加目的に関する質問を合わせた質問紙調査を実施(平成20年5月)。

第2回調査は、第1回調査と同じ子育て意識に関する質問44項目と、参加して特に感じることなどの質問を加えた質問紙調査を実施(平成21年2～3月)。(第1回調査と第2回調査の記入者を特定する為に子どもの生年月日と性別の記入欄を設けた)

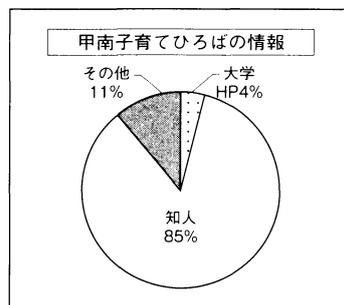
(2) 結果および考察

1) 参加者の属性(第1回調査の有効回答者71名を分析対象とした)

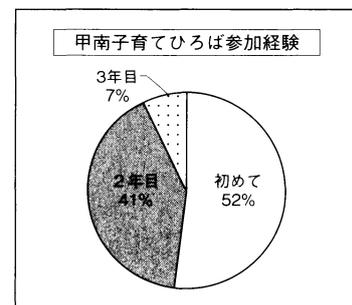
①子どもの人数



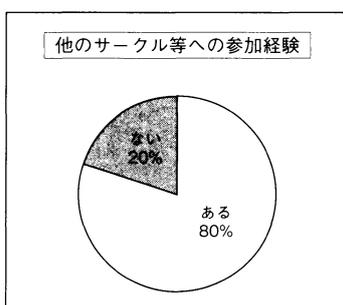
②甲南子育てひろばの情報



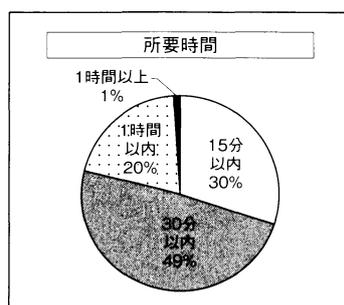
③甲南子育てひろばの参加年数



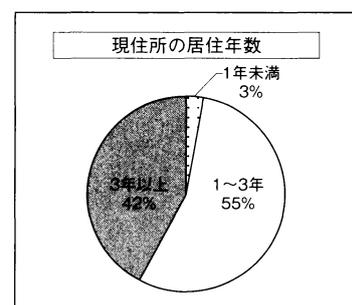
④他のサークル、幼児教室等の参加経験



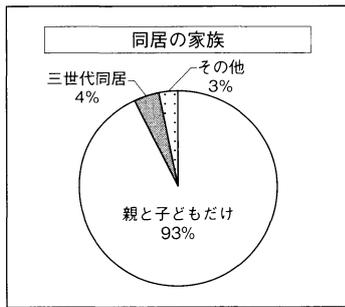
⑤所要時間



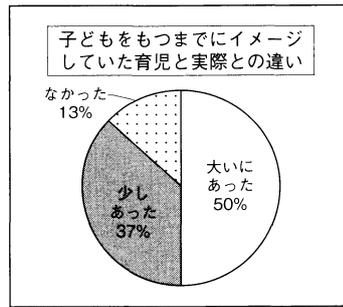
⑥現住所の居住年数



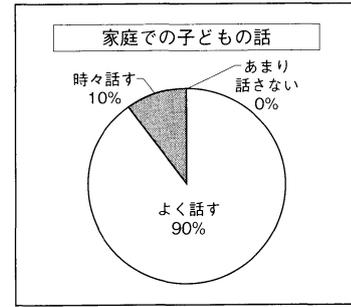
⑦同居の家族



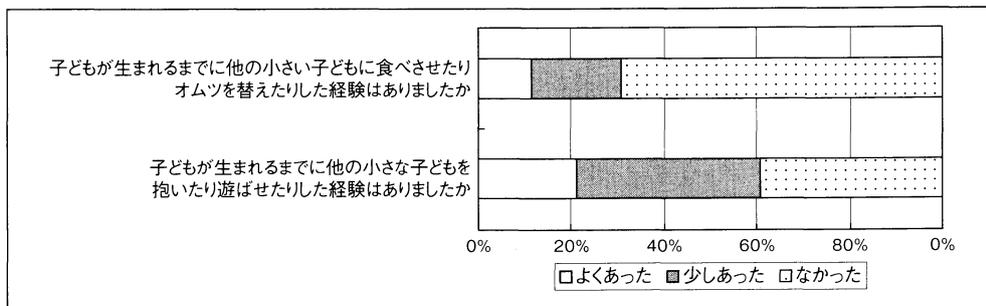
⑨イメージと実際の育児との違い



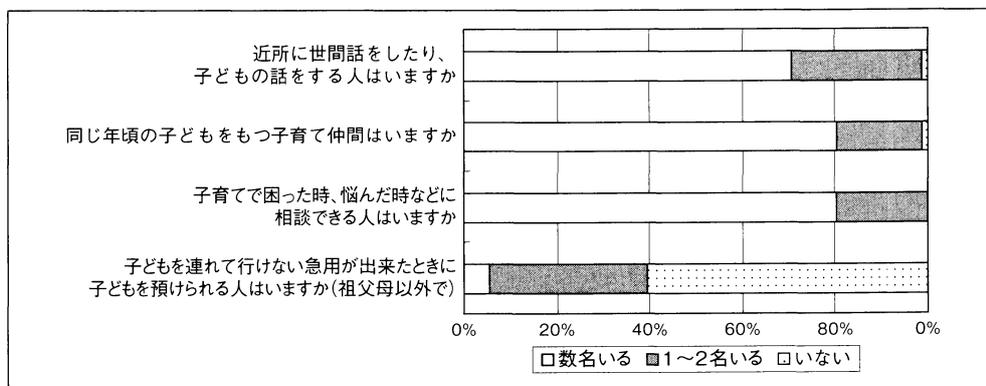
⑩家庭での子どもの話



⑧出産までの育児経験



⑪子育て仲間や相談者等の有無



第1子との参加が半数以上を占め、子どもの年齢が3歳を過ぎるまでは1年だけではなく継続して参加する方が多い。また、他の幼児教室等への参加経験のある人が8割、家庭で子どもの話をよくすると答えたのが9割で比較的子育てに関心の強い人が多いと思われる。

甲南子育てひろばの参加募集は大学のHPでのみ行っているが、参加者の8割以上が口コミで情報を得ていることや、8割が自宅からの所要時間が30分以内であることから、甲南子育てひろばが地域に根ざした子育て支援の拠点となってきたことを示すものと考えられる。

出産までに他の小さい子どもを抱いたり遊ばせたりした経験がないのは4割、食べさせたりオムツを替えたりした経験となると7割の親が全くないと回答して

おり、原田(2003)小田(2007)で報告されたより高い割合となっている。親と子どもだけの世帯が9割強で、半数が子どもを持つまでにイメージしていた育児と実際とは大いに違いがあったと答えているが、子育て仲間や子育ての相談相手は数名いると8割近くの人が答えており、甲南子育てひろばの参加者は、子育てのヒントを得たりや不安を解消するうえでプラスの効果をもたらすであろう人的ネットワークを持つ人が多いと推測される。

2) 子育て意識の変化

第1回調査と第2回調査共に回答が得られた56名を対象に子育て意識7因子についての変化を分析した結果、「不安感」が有意に低くなっていた(表9)。これは、サークル活動に参加することで不安感が減少することを示した小田・横川(2007)と共通するもの

表9 子育て意識の変化

	1回目平均値	2回目平均値	t検定結果
充実感	29.95(2.08)	29.41(2.45)	t=2.72**
不安感	17.50(4.06)	16.70(3.67)	t=2.13*
負担感	12.48(3.10)	12.21(3.14)	n.s.
孤立感	9.30(2.90)	9.10(2.53)	n.s.
親としての成長感	10.50(1.61)	10.43(1.51)	n.s.
社会的意識	11.61(2.48)	11.34(2.19)	n.s.
社会参加意識	11.41(1.96)	11.59(2.22)	n.s.

() : SD * : p<.05 ** : p<.01

で、大学内における子育てひろばにおいても、ひろばに参加して子育て仲間とのふれあうことなどを通して子育て不安が軽減することを実証したものと見える。なお、「充実感」が有意に低くなったことに関しては、第1回調査での平均値が極めて高かったことによるものと考えられる(最高32点)。

子育てひろばへの第一の参加理由として、1番多いのが「子どもの遊び仲間作り」「安心して遊べる場」であった。大学内に設けられ登録制であることなどが親の安心感を得る要因になっていると思われる(図

5)。

1年間の活動終了時に参加して感じることに質問に対しては、「自分自身の話し相手や子育て仲間ができた」「子どもの遊び仲間ができた」「自分自身がリフレッシュできた」の順に回答が多かった(図6)。初めの参加理由では「子どもの遊び仲間作り」や「場の安全」が意識されていたのが、1年間の活動終了時には多くの親が自分自身のことにプラスの効果を感じている。

当初の緊張がほぐれて親同士、気楽に話ができるようになると「子育て中」という共通の状況にある母親同士が本音で子育ての悩みやストレスの発散法を話し合う姿が多く見られるようになる。また、常に同じスタッフが親子の様子を見守り続けることで、スタッフに些細なことでも相談できるようになってくる。子育てのヒントを得たり、子育てに悩んでいるのは自分だけではないという安心感がもてたりすることが、不安感などのネガティブな子育て意識の軽減につながる要因になっていると考えられる。

3) 甲南子育てひろばへの期待

参加した1番の理由を聞いたとき、「子育てについて学べると思った」の回答が13.7%あった。小田

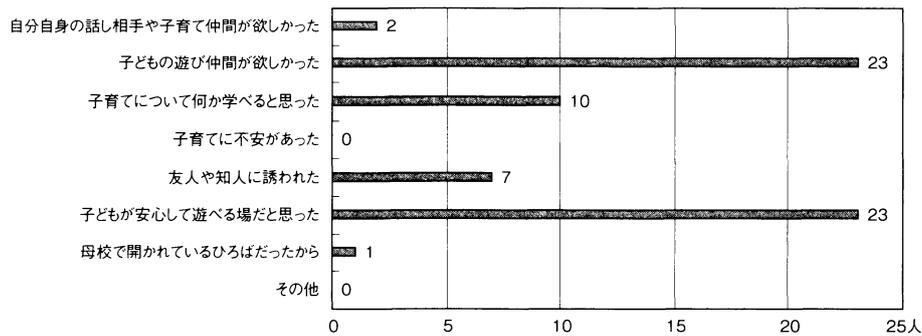


図5 甲南子育てひろばに参加した1番の理由

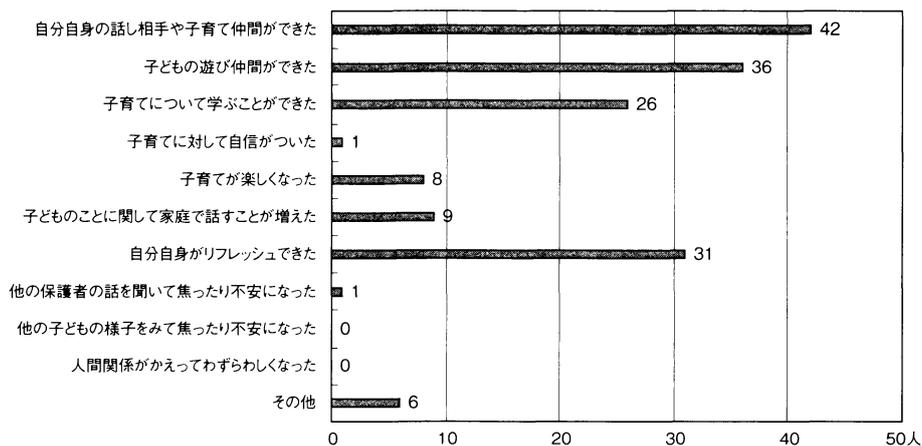


図6 H20年度甲南子育てひろばに参加してみて感じることに

(2007)では同様の質問で8.6%であったのに比べその割合は高く、大学に設置されたひろばに対する参加者の期待度の現れと考えられる(図5)。

活動終了時のアンケートの「感想や今後のひろばへの意見(自由記述)」では、親子ともに友達ができたことの喜び、感謝が多く寄せられた。親子だけの単調になりがちな生活から一歩外に踏み出すきっかけであったり、子育てのいろいろな意見を聞く機会であったり、家事を忘れて子どもとじっくり向き合える時間であったり、他の親子の関わり方から学ぶ場であったりと、参加者それぞれがひろばでの時間を有効に活かしているという意見が多くみられた。スタッフが毎回提供している手遊びや絵本の読み聞かせの時間、毎月の製作遊びを親子で楽しみにしていて、今後も継続し内容を充実させてほしいという希望も多かった。

子育てのさまざまな学びの場としての期待とともに、何より快適で安心して遊べる環境であることへの満足度が高く、この二点に関しての期待に答えていくことが大学におけるひろば活動の大きなポイントであると考えられる。

4. まとめと今後の課題

「甲南子育てひろば」は、年度初めの参加募集ではほぼ定員を満たし、年度途中での参加希望者からの問い合わせも少ない状況である。当初週2回まで参加可能としていたが、より多くの希望者に利用していただくために週1回の参加に変更した経緯がある。参加者の多くがひろばへの参加理由に子どもを遊ばせる安心安全な場所であることを挙げている。甲南子育てひろばへの参加希望者が多くなったのは、現代の子どもを取り巻く社会の状況が危険と隣り合わせであり、安心して子どもを遊ばせたいという親のニーズと「大学内にあるひろば」は安全が確保された場所というイメージが一致した結果であると考えられる。

また、今回のアンケート調査では、自分の子どもを出産するまでに子どもと関わる経験が極めて少なく、思い描いていた子育てのイメージと現実の子育てでは大いに違いがあると感じている参加者が多いことが示されたが、それらの参加者も、甲南子育てひろばに継続して参加することで子育て不安が減少することが立証された。保育経験のあるスタッフが常にひろばにいて子どもにも自分にも対応してくれるという安心感が得られ、子育てに自信がなく不安に思っていることやわからないことなど、どんな些細なことでも気軽に相

談できることが要因の一つとして考えられる。初めて育児を経験する母親から、書籍やインターネットから得る育児情報と現実の違いによる不安に対しての相談を受けることも少なくない。中には毎回何かしらの質問をスタッフに投げかける参加者もいる。子育て経験者からみれば誰にでも多かれ少なかれあるものだと思う程度のことで本人にとっては真剣な悩みであり、小さな不安を重ねることが子育ての自信喪失につながる。ひろばで親子が安心して遊ぶ中で子育てのアドバイスを受けて、わが子よりも少し早く生まれた子どもたちの様子を見て子育ての見通しをもてたりすることで不安に思う気持ちを軽くして帰れることは、日々の子育て不安の減少に大きな役割を果たしていると考えられる。

ひろば終了時のアンケートでも自分自身の子育て仲間ができて、リフレッシュすることができたと答えた参加者が多かったが、子どもとの単調になりがちな生活の中で、ひろばに行き子育て仲間と一緒に過ごすことで気持ちがリフレッシュし、新たな気持ちで子どもと向き合えるようになったと話す参加者も多くみられる。家庭において多くの母親は家事や他の兄弟姉妹の事などで忙しく、ゆとりをもって一人の子とじっくり向き合せて過ごすことができにくいのが現状である。ひろばが日常と切り離された場所となり、子育て仲間との会話などでリフレッシュすることによって生み出された母親の心のゆとりが、改めて子どもの成長を感じさせたり子どもとの信頼関係を育んだりする原動力となりうるのではないだろうか。リフレッシュ効果という点では、子育て中の母親にとって大学構内に足を踏み入れる機会はあまりなく、それらの母親にとって女子大生たちの様子を見聞きたり直接ボランティアとしてひろばに参加している学生と話したりすることができる「大学内子育てひろば」は、ある意味非日常的な場所であり、児童館などの子育て支援施設と比べてその効果を高める要素を持つと考えられる。

また今回の調査で、学びの場である大学に日常的に通うことで、自分も何かを学びたいと考える参加者が多いことがわかった。これまでも学内の先生に各専門分野からの話題提供、子育てのアドバイス等をいただいているが、参加者からもっと話が聞きたいという要望が多い。今後も、母親としてだけでなく一人の女性としてより豊かな人生を送るための学びの機会として、より多くの先生たちに「わいわいトーク」への参加協力をいただき「大学内子育てひろば」としての特性を活かしていくことが望まれる。

継続してひろばに参加するようになった学生ボランティアに対しては、より子どもへの理解を深めるよう参加者から積極的に育児の話を書く機会を作ったり、子どもへの対応の仕方を具体的に示したりして、将来の仕事に対する意欲を高め、子育てが楽しみになるような指導が必要と考える。学生と参加者が共に、ひろばの活動に主体的に取り組んで社会参加意識を高めていけるように、これまでスタッフが行っていた手遊びや絵本の読み聞かせ、季節の行事の企画への参加なども呼びかけていきたい。

調査では、「甲南子育てひろばに楽しく参加することができた」に対して「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」の回答を合わせると 100% になり、逆に「他のメンバーと意見が合わず気まずい思いをした」では「あてはまらない」「どちらかというにあてはまらない」を合わせて 98%、「他のメンバーに気を使うことが多かった」は 96% で、参加者にとってひろばが心地よい居場所となっていることが伺われる。しかしひろばでの参加者の様子を見てみると、特に子どもの方に育てにくさを感じる親子の場合は、子どもの動きに翻弄されて常に母親が周りに気を使う姿が目につく。スタッフは自然にそれぞれの親子間に入ることを心掛け、少しでも母親の負担感が軽くなるように言葉をかけているが、子どもの状態によっても、親自身の援助に対する受け止め方によっても個々にその対応を変えていかなければならないと考えている。

また、親が楽しくおしゃべりをすることでリフレッシュできる良さは認めることであるが、スタッフや学生ボランティアが居ることで子どもに目が行かなくなる親の姿が目につくのも事実である。子どもとじっくり向き合える場所のはずが、親に振り向いてもらえないことで子どもにストレスを与える場所になるようでは問題である。欠席の連絡やおやつの与え方等、ひろばの基本的なルールを守れない参加者も少なからずいる。子どもも親も育ち合い、すべての親子にとって居心地の良い場所となるために、登録制で毎週同じメンバーが集い継続して親子に関わっていくことができる甲南子育てひろばの特性を活かして、一人ひとりにあった助言、支援を考えていくことが今後の大きな課題である。さらに、しょうがいやしんどさを抱える子どもやその親により良い対応をするためには、大学内の専門機関や同じ地域にある他の子育て支援機関との連

携を深めるなどの取り組みをしていく必要があると考える。

引越してきた親子が地域に溶け込んで生活できる助けとなれるような子育て情報などを発信できるように、H22 年度中には学生と共に甲南子育てひろばの HP を作成できるよう取り組んでいる。今後、参加者同士が本音で子育ての悩みやストレスの解消法を話し合えるような関係作り、気軽に子育ての相談ができるような雰囲気作りを心掛け、親子で楽しく遊べる安心・安全な場、子育てについての学びの場として活動を継続させて発展させていくことが、地域にとって「甲南子育てひろば」が本当に大切な場所になることではないだろうか。

引用文献

- 厚生労働省 2004 少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について
- 厚生労働省 2007 地域子育て支援拠点事業実施要綱
- 小田和子 2007 子育てサークル参加者の子育て意識の変化に関する研究－親の育ちを考える手がかりとして－兵庫教育大学大学院学校教育学専攻幼年教育コース平成 18 年度修士論文
- 小田和子・横川和章 2007 子育てサークル参加者の子育て意識の変化に関する研究 (1) 日本教育心理学会発表論文集 49, P413
- 小田和子・横川和章 2007 子育てサークル参加者の子育て意識の変化に関する研究 (2) 日本教育心理学会発表論文集 49, P414
- 兵庫県 2010 新ひょうご子ども未来プラン 兵庫県次世代育成支援行動計画 児童福祉法第 6 条の 2 2009 改正
- 大学と連携した新たな子育て支援事業補助金交付要綱 2007 神戸市地域子育て支援事業拠点事業「ひろば型」補助金交付要綱
- 原田正文 2004 いま、ほんとうに必要な育児支援とは何か? (大阪レポート) から 23 年目の調査が描くもの保健師ジャーナル, 60, 1~12
- 石岡由紀・森本玲子 2009 子育て支援の現状と課題－神戸親和女子大学子育て支援センターの実践から－児童教育学研究 (神戸親和女子大学児童教育学会) 28, p 97~107
- 石岡由紀・森本玲子 2010 子育て支援の現状と課題 (2)－神戸親和女子大学子育て支援センターの実践から－児童教育学研究 (神戸親和女子大学児童教育学会, 29, p 145~152

《資料》

第1回目のみ実施したアンケート項目

1. 甲南子育てひろばに参加されるのは初めてですか ①はい ②いいえ→(計 年目)
2. 甲南子育てひろばのことを何でお知りになりましたか
①大学のホームページを見て ②知人に聞いて ③その他()
3. 自宅からひろばまでの所要時間は ①15分以内 ②30分以内 ③1時間以内 ④1時間以上
4. 甲南子育てひろば以外の子育てサークルや幼児教室などに参加したことはありますか ①ある ②ない
5. 現在お住まいの地域に居住されてどのくらいですか ①1年未満 ②1~3年 ③3年以上
6. 同居のご家族は ①親と子どもだけ ②三世同居 ③その他
7. 子どもが生まれるまでに、他の小さい子どもを抱いたり、遊ばせたりした経験はありましたか
①よくあった ②少しあった ③なかった
8. 子どもが生まれるまでに、他の小さい子どもに食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありましたか
①よくあった ②少しあった ③なかった
9. 子どもをもつ前にイメージしていた育児と実際の育児とでは、ちがいがありましたか
①大いにあった ②少しあった ③あまりなかった
10. 子どものことを家庭で話しますか ①よく話す ②時々話す ③あまり話さない
11. 近所に世間話をしたり、子どもの話をする人はいますか ①数名いる ②1~2名いる ③いない
12. 同じ年頃の子どもをもつ子育て仲間がいますか ①数名いる ②1~2名いる ③いない
13. 子育てで困った時、悩んだ時などに相談できる人はいますか ①数名いる ②1~2名いる ③いない
14. 子どもを連れて行けない急用が出来た時に、子どもを預けられる人はいますか(祖父母以外で)
①数名いる ②1~2名いる ③いない
15. 甲南子育てひろばに参加しようと思った1番の理由は何ですか
①自分自身の話し相手や子育て仲間が欲しかった ⑤友人や知人に誘われた
②子どもの遊び仲間が欲しかった ⑥子どもが安心して遊べる場所だと思った
③子育てについて何か学べると思った ⑦母校で開かれているひろばだったから
④子育てに不安があった ⑧その他()

第2回目のみ実施したアンケート項目

☆ 甲南子育てひろばに参加してみて、特に感じることを3つまで○で囲んでください。

1. 自分自身の話し相手や子育て仲間ができた
2. 子どもの遊び仲間ができた
3. 子育てについて学ぶことができた
4. 子育てに対して自信がついた
5. 子育てが楽しくなった
6. 子どものことに関して家庭で話すことが増えた
7. 自分自身がリフレッシュできた
8. 他の保護者の話を聞いて焦ったり不安になった
9. 他の子どもの様子を見て焦ったり不安になった
10. 人間関係がかえってわずらわしくなった
11. その他()

☆ 甲南子育てひろばの参加の様子についてお尋ねします。以下のそれぞれの文を読んで、「4. あてはまる」「3. どちらかといえばあてはまる」「2. どちらかといえばあてはまらない」「1. あてはまらない」の4つのうちで、最もあてはまる数字に○をつけてください。

1. 子育てひろばに楽しく参加することができた・・・ 4 3 2 1
2. ほとんど休まずに参加した
3. 子どもとじっくり向き合って遊ぶことができた
4. 他のメンバーに自分から積極的に話しかけた
5. 我が子だけでなく他の子どもたちにも話しかけたり遊んだりした
6. 他のメンバーと意見が合わず、気まずい思いをした
7. 他のメンバーに気を使うことが多かった
8. 手遊びや親子ふれあい遊びに楽しく参加できた
9. 絵本の読み聞かせに楽しく参加することができた
10. 子どもどうしのトラブルが多くて困った

☆ 子育てひろばに参加した感想や、ひろばの今後に向けてのご意見などがあれば、お聞かせ下さい

子育て意識に関する質問44項目(第1回,第2回共に実施)

☆ 以下のそれぞれの文を読んで、今のあなた自身の気持ちに、どの程度あてはまりますか？

「4. あてはまる」「3. どちらかといえばあてはまる」「2. どちらかといえばあてはまらない」「1. あてはまらない」の4つのうちで、最もあてはまる数字に○をつけてください。

1. 自分の子どもはかわいいと思う・・・・・・・・・・・・・・・・4321
2. 自分の子どもと遊ぶのは楽しい
3. 子どもを育てるのは楽しく、幸せなことだと思う
4. 育児のことで心配なことがある
5. 母親、父親としてうまく対応できないときがある
6. 自分の子育てが、まちがっているのではないかと不安になる
7. 子どものすることを、余裕を持って見ることができる
8. 日々の生活の中で、子どもの育ちを実感することがよくある
9. 同じ年頃の子どもでも、育ち方はいろいろだと思う
10. 子どもを育てることを、負担に感じる
11. 子どもにまつわりつかれるのを、うるさく感じる
12. 子どもと離れたと思うことがある
13. 子どもが、今のような気持ちでいるのか、だいたいわかる
14. 今だけでなく、先の見通しを持って子育てをしている
15. 子どもならではの発想や、子ども独自の世界があることを感じる
16. 子育てで、自分はやりたいことができずに我慢していると思う
17. 子育てで、イライラすることがよくある
18. 子どものことを考えるのがいやになることがある
19. 子どもと一緒にいると気持ちが安らぐ
20. 子どもの成長に、とても喜びを感じる
21. 自分の子どもだけでなく、他の子どものこともかわいいと思う
22. 子どもとどう関わればよいのか、わからなくなることがある
23. 同じ年頃の子ができていることを、自分の子どもができていないと不安になる
24. 子育てに自信がもてない
25. 子育てによって自分自身も人間的に成長していると思う
26. 子育てをとおして、自分の視野が広がると思う
27. 子育てによって、自分の活動範囲が広がっていると思う
28. 育児をしている間に、世の中から取り残されていくように思う
29. 子育てをがんばっていることを、誰にもわかってもらえない
30. 子どもとばかりいて、孤立した感じがする
31. 自分だけでなく、まわりの支えがあって子育てができていると思う
32. 母親、父親であることに充実感を感じる
33. 子育てをとおして、地域の人との関わりが深くなると思う
34. 自分ひとりで子育てをしているように思う
35. 子どもだけが生きがいだと思う
36. 子育てで悩んでも誰にも頼れないと思う
37. 育児や家庭のことについて、他の人とおしゃべりするのが好きだ
38. 知らない人とも積極的に話ができる
39. 人の面倒を見るのが苦にならない
40. 誰とでもすぐに親しくなれる
41. 地域の行事などに参加したい
42. 幼稚園や小学校のPTA活動(役員など)や子ども会活動に積極的に参加しようと思う
43. 将来、ボランティアなど社会のためになることをやってみたい
44. 親が子どもを育てるのはもちろんだが、地域で子どもの成長を支えていくことが大事だと思う